

## 探索及び愛着行動に関する縦断的研究

大瀧ミドリ

(昭和58年9月30日受理)

### Exploratory Behavior and Attachment Behavior during the First Three Years of Life

Midori OTAKI

(Received September 30, 1983)

#### 研究目的

子どもが発達初期に主たる養育者との間に安定した愛着を形成することが、子どもの情緒的、社会的、知的発達に大きなかわりをもつことが指摘されている。しかしながら、愛着の概念は理論的立場によって、それぞれ異なるとらえ方がなされているのが現状である。

たとえば、Freudに代表される精神分析理論では、子どもは飢餓体験を通して他者としての母親の存在に気づき、母親の存在そのものが子どもの満足の対象となる時をもって愛着が成立したとする。また学習理論では、子ども自身の快と不快体験が母親の存在の有無と結びつく時点をもって愛着の成立とみなしている。一方、この学習理論の立場を否定するのがCommunication理論である。この理論では、母親と子どもは発達初期において二人の間のみ通じる特殊なCommunication Skillを発達させると考えている。そのSkillをもたない者に対して子どもはStranger Fearを生じる。このStranger Fearが生じることで愛着の成立をとらえている。またBowlbyはEvolutionary Ethologyの立場に立って、愛着の発現行動である愛着行動の出現によってその成立をみる事が出来るとしている。愛着行動は、無力な子どものそばに母親をとどめるために非常に大切な発達適応機能であると考えられている。愛着行動は母親と子どもとの物理的な距離が許容範囲を超えると自動的に活発化する特性をもっている。さらに愛着の形成には臨界期があり、生後一年間に主たる養育者との間に愛着を形成しない場合には、その後の発達に悪い影響を与えると指摘し、非常なセンセーションを引き起こした。このBowlbyの考え方を児童学科

に対してBischofは、愛着行動は母親との接近を獲得するために発現するのではなく、むしろ安心感を得ることこそ重要な意味をもっと考えている。それ故、Bowlbyのいうように愛着行動は、その場の状況によって自動的に統制されるのではなく、子ども自身の感情によって統制されることを強調している。このようなBowlbyとBischofの考え方に対して、AinsworthはBowlbyのいう接近とBischofのいう安心感の考え方をとり入れ、かつ独自に愛着形成の質に注目する考え方を提唱している。愛着が形成される過程の質的な違いが、愛着に個人差を生むとするAinsworthの考え方に対しては、SroufeとWatersも支持する結果を出している。

Ainsworthは愛着の質的な違いは、安定と不安、愛着対象への接近と回避、接近を求める行動の活発さと不活発さ、によってとらえることが出来るとし、その分類手段としてStrange Situationの手法を考案している。Strange Situationは8つのEpisod(以下Ep.と記す)で構成されており、Ep.が進むにしたがって、母子分離によるストレスが加わるように設定された実験手続である(ストレスのピークはEp. 6にある)。

そこで本研究では、Ainsworthらの考え方に立って、Strange Situationを1才、2才、3才時と同一被験者に縦断的に施行することにより、愛着行動の発達的变化を明らかにしたいと考えている。さらに、愛着行動と探索行動は相対的な行動であると考えられるために、愛着行動が活発な状況では探索行動が不活発になり、愛着行動が不活発な状況では探索行動が活発になるという関係をもっているものと思われる。それ故、探索行動における発達的变化についても検討する。

なお、各Ep.における愛着行動と探索行動の関係につ

いてはつぎのような関係が仮定される。

まず、母親が子どもと同室する Ep. 2 では、用意された玩具にひかれて探索行動が活発化し、母親が子どものそばにいるために、愛着行動は余り認められないものと考えられる。つぎに子どもが初めて出会う人が Stranger として入室する Ep. 3 では、Stranger に対する不安や恐怖感が生じ、その結果愛着行動は増し、探索行動は減少するものと思われる。また Ep. 4 では母親が子どもに気づかれないように退室し、Ep. 6 では母親は“バイバイ”と言い、退室を知らせてから退室する。このように両 Ep. は状況的に違っている。しかし、いずれも母親が不在であることで、泣くあるいは母親を捜し求める等の愛着行動が活発化し、探索行動は減少することが考えられる。Ep. 5 と 8 では退室していた母親が再入室する。これらの Ep. では母親への接近・接触行動あるいは一度得た接触を維持しようとする接触維持行動などの愛着行動が活発化し、探索行動が減少することが考えられる。そして Ep. 7 は Stranger が入室し、母親は不在である。この Ep. では Ep. 4 及び 6 と同様の傾向が認められるものと思われる。しかしながら、母子分離によるストレスではなく、一人室内に残されたことによりストレスを受けている子どもは、Stranger の入室によって、再び探索行動を活発化するであろう。いずれにしても、この Ep. における探索行動は母親が同室する Ep. のものより低いであろう。

## 研究方法

被験者：都内在住の第一子の男児 3 名とその母親および女児 3 名とその母親の計 6 組の母子である。母親は専業主婦である。

研究期間：被験児の 1 才 0 ヶ月から 3 才 3 ヶ月に亘る約 2 年間である。実験日は毎年被験児の誕生日の前後 2 週間以内の適当な 1 日をあてる。なお 3 才時のみ実験者の都合で 3 才 3 ヶ月時に施行する。

研究手続：Ainsworth の Strange Situation に準拠して行なう。Strange Situation はつぎの 8 つの Ep. から構成されている。

Ep. 1 母子を実験室に導入	30秒
Ep. 2 母子同室	3分
Ep. 3 母子及び Stranger 同室	3分
Ep. 4 子及び Stranger 同室 (母退室)	3分
Ep. 5 母子同室 (Stranger 退室)	3分

Ep. 6 子のみ在室 (母退室)	3分
Ep. 7 子及び Stranger 同室	3分
Ep. 8 母子同室 (Stranger 退室)	3分

Ep. 1 以外の標準時間は 3 分間である。ただし、子どもの状態によって Ep. の時間を長短いずれにも変更することはできる。この判断は母親に一任する。3 才時については母親の判断にまかせず、実験者の判断によって子どもが強いストレスを感じていると思われる Ep. はすべて 30 秒間に短縮する。これは、強い母子分離による不安体験を与えることはこの年齢には有益でないと判断しての配慮である。

Stranger Situation に使用する玩具の条件としてつぎの点を考慮する。まず第 1 に、子どもにとって新奇性をもつ玩具であり、子どもの興味を喚起するものであること。ついで、子どもが母子分離を経験して動揺する時に、子どもの気持を静める効果を持つ玩具であること。

この二点を考慮し、一般家庭にはあまり普及していない外国製の玩具を利用する。なお、実験開始時における母親の報告では、いずれの被験児もこれらの玩具に触れた経験をもっていないとのことである。それ故、実験に用いた玩具は、いずれの被験児においても新奇性については等価であると考えてよいものと思われる。実験に用いた玩具は各実験時の子どもの年齢を考慮して多少入れかえる。

- 1 才時：ビーズブロック、ボール、電話、積木、人形、動物玩具 2 種、パズル、カタカタ、子ども用椅子。
- 2 才時：1 才時の玩具に人形を 2 種加え、さらに積木の数を 6 個から 12 個に増す。
- 3 才時：B ブロック、ボール、電話、積木、人形 3 種、パズル、カタカタ、子ども用椅子、絵本、トンカチ積木、組木。

実験室の広さは約 8 畳程であり、室内には上記の玩具の他に母親と Stranger 用の椅子が 2 脚ある。継続研究の途中で実験室が改装されたため、3 才時とそれ以前とは雰囲気が非常に違っている。しかしながら Stranger Situation に用いられる実験室は、子どもにとって新しい場所という条件がついているので、このような実験状況の違いはむしろ歓迎すべきものと考えている。

Stranger の役は、児童学専攻の子ども好きな女子学生が演ずる。

Stranger Situation における母子の行動は、すべて VTR に記録する。なお、各 Ep. で分析対象とした行動

はつぎのものである。

I. 探索行動

1. Visual Exploration
2. Exploratory Manipulation
3. Exploratory Locomotion

II. 愛着行動

1. Crying
2. Vocalization
3. Visual Orientation
4. Proximity and Contact Seeking Behavior
5. Contact Maintaining Behavior
6. Search Behavior
7. Distance Interaction

探索行動のすべてと Crying, Visual Orientation は各 Ep. ごとに15秒間隔のタイムサンプリングで頻度を測定する。それ故、得点は最低0から最高12の間に分布する。Vocalization は絶対頻度を測定する。その他の愛着行動はその強度について7段階評定を行なう。Ainsworth は

Smiling も愛着行動としているが、VTR の映像から Smiling を完全にチェックすることは不可能であるため今回の分析では除いてある。

結果及び考察

I. 探索行動

子どもが初めての場所で初めての人に会う状況に母親とともに居る時、母親の存在は子どもの探索行動にどのような影響を与えるのであろうか。また年令的な発達との関係はどのようなものであるのか。このような疑問に対しては、母親とともにいる Ep. と Stranger が同室する Ep. の探索行動を比較することが必要であろう。FIG. 1 は探索行動の総計についてみたものである。

年令間 [ $F(2, 12)=21.217, p<.001$ ] および Ep. 間 [ $F(6, 12)=32.610, p<.001$ ] には有意差が認められる。2才時における探索行動の頻度は1才時および3才時に比較して有意に高い ( $t=8.918, p<.005, t=3.833, p<.01$ )。また Ep. 5 と 6 における探索行動は Ep. 5

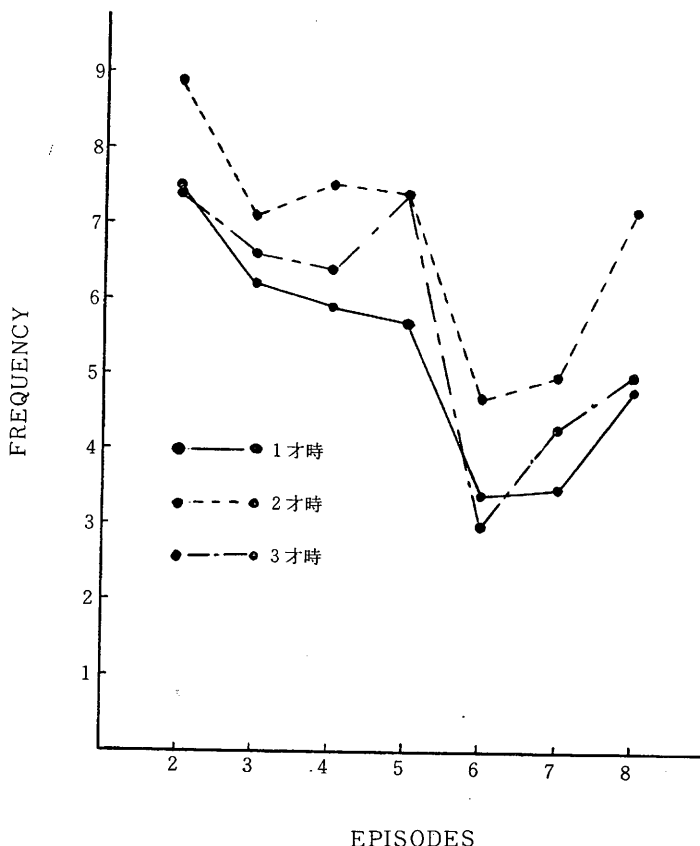


FIG. 1 Exploratory Behavior

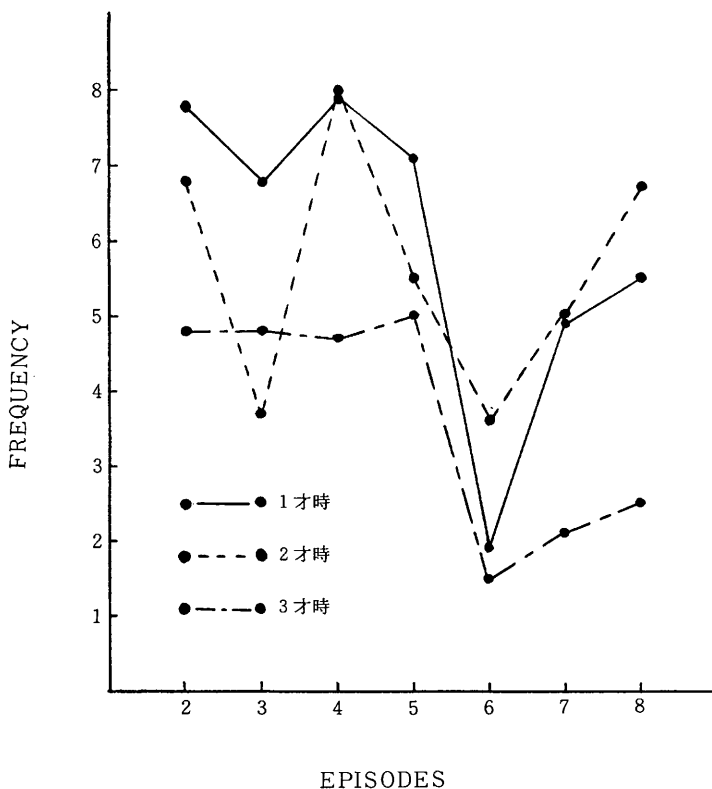


FIG. 2 Visual Exploration

において有意に高い ( $t=4.868, p<.05$ ). さらに Ep. 2 3 とおよび Ep. 7 と 8 の間には 5% 水準で有意差はない ( $t=4.504, p<.1, t=3.212, p<.1$ ). しかし母親が同室する Ep. 2 および 8 の方が Stranger が同室する Ep. よりも活発な探索行動を示す傾向がある。

#### 1. Visual Exploration

FIG. 2 は Visual Exploration についてみたものである。

Visual Exploration とは、玩具に視覚的の注意を向ける行動であり、探索行動の中で最も消極的な行動である。年令間 [ $F(2, 12)=9.749, p<.01$ ] および Ep. 間 [ $F(6, 12)=6.276, p<.01$ ] に有意差が認められる。3才時に比較して1才時、2才時の方が有意に高い ( $t=6.367, p<.001, t=2.937, p<.05$ ). また2才時の Ep. 2 と 3 および Ep. 3 と 4 を比較すると Ep. 3 で減少し ( $t=2.299, p<.1$ ), Ep. 4 で増加する ( $t=3.065, p<.025$ ). このような差異は1, 3才時では認められない。一方, 1, 2, 3才時に共通に認められる傾向は, Ep. 5 と 6

の間における著しい減少である ( $t=3.163, p<.025, t=3.276, p<.025, t=3.250, p<.025$ ). さらに1才時では Ep. 6 と 7 の間にかかなりの増加が認められる ( $t=2.446, p<.1$ ). しかし, この増加は母親が同室する Ep. 5 程ではない。

このように Stranger の入室が Visual なレベルの探索行動に最も強い負の影響を与えるのは2才時である。そして Ep. 6 の最もストレスの高い母子分離の体験はいずれの年令にも著しい負の影響を与える。このストレスは Stranger の存在で軽減させることができるのは1才時のみで, 2, 3才時ではほとんど軽減させることはできない。

#### 2. Exploratory Manipulation

FIG. 3 は Exploratory Manipulation についてみたものである。

Exploratory Manipulation とは、玩具と具体的にかかわりをもつ状態での探索をいう。この中には子どもの位置の移動をとまなうような玩具とのかかわりは含まれな

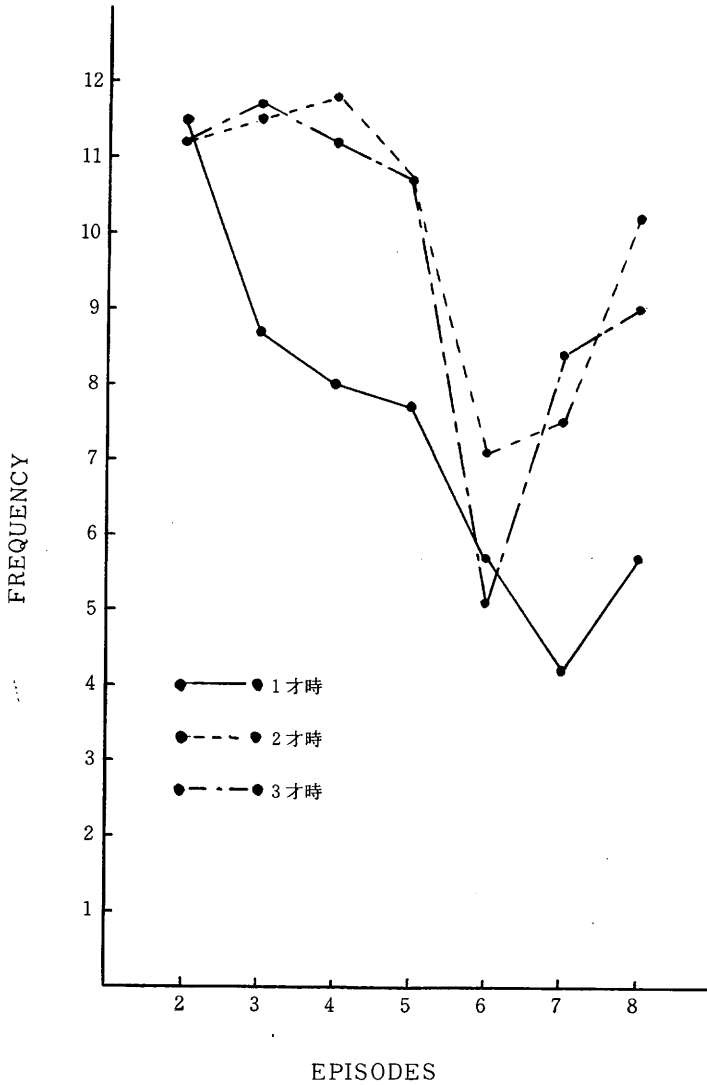


FIG. 3 Exploratory Manipulation

い。FIG. 3 にみられるように Visual Exploration とは かなり異なった様相を呈している。年令間 [ $F(2, 12) = 12.023, p < .01$ ] および Ep. 間 [ $F(6, 12) = 10.612, p < .001$ ] に有意差が認められる。1才時の Exploratory Manipulation は2, 3才時に比較して有意に低い ( $t = 3.483, p < .025, t = 3.157, p < .025$ )。また2, 3才時には Stranger の入室によるマイナス影響はほとんど認められない。むしろ Ep. 2 に比較して Ep. 3 および 4 で高い頻度が認められる。これは Stranger が Ep. 3 で被験児に積極的にかかわり、玩具に興味を引くように働

きかける役割が与えられていることによるものと思われる。また Ep. 4 で子どもが、母子分離を体験して強い動揺を示す場合にも、積極的に子どもにかかわるよう指示されている。一方、Ep. 5 で再入室する母親は、子どもが動揺を示さず一人で遊べるならば、椅子に着席し、本を読むように指示されている。Ep. 4 で母子分離によって動揺を示す子どもの多くは、Stranger とのかかわりによって、Ep. 5 までに安定を得て、一人で遊べる状態に戻っている。そのため Ep. 5 で退室する Stranger の方に関心を向け、退室する Stranger を目で追ったり、“お

姉さんは？”と Stranger の所在を母親に問うものもある。このような母親と Stranger とのかかわり方の違いが、Ep. 3 および Ep. 4 でこの行動の頻度を高める要因となっているものと思われる。

子どもが一人で在室する Ep. 6 と母親が同室する Ep. 5 では、3才時は Ep. 6 で有意な減少を示す ( $t=2.621, p<.05$ )。1才時は5%水準で有意差は認められないが、Ep. 5 に比べ Ep. 6 でかなり減少する ( $t=2.360, p<.1$ )。2才時ではこのような差異は認められない。また、Ep. 6 で有意な減少を示した3才時は、Ep. 7でのStrangerの入室によって、再び玩具に興味を向ける ( $t=2.122, p<.1$ )。しかし、その頻度は Ep. 3 および 4 には及ばない。1, 2才時は Ep. 6 と 7 の間に有意差は認められない。これらの年齢では強いストレスを体験したあとでは、Stranger の存在がこの行動を活発にする効果は持たない。また3才時では Ep. 6 と 8 を比較すると、母親が同室する Ep. 8 で探索行動は活発化する ( $t=2.281,$

$p<.1$ )。しかし、1, 2才時には有意差は認められない。

### 3. Exploratory Locomotion

FIG. 4 は Exploratory Locomotion についてみたものである。これは子どもが玩具とかかれりながら位置の移動を生じる、または子どもが玩具とかかわるために位置の移動を行なうなど、子どもの位置の移動をともなう探索行動をいう。

年齢間 [ $F(2, 12)=5.942, p<.025$ ] および Ep. 間 [ $F(6, 12)=4.158, p<.025$ ] に有意差が認められる。FIG. 4 では、1才時と2, 3才時は異なった様相を呈している。

2, 3才時では Ep. 2 と 3 の間に急激な減少が認められる ( $t=2.213, p<.1, t=3.997, p<.025$ ) が、1才時には認められない。この減少は Stranger の入室の結果とみなされる。また1才時にこのような傾向が顕著に認められない理由の1つに移動能力における発達の違いが関係しているものと思われる。

母子分離体験の影響を見るために Ep. 2 と 4 および

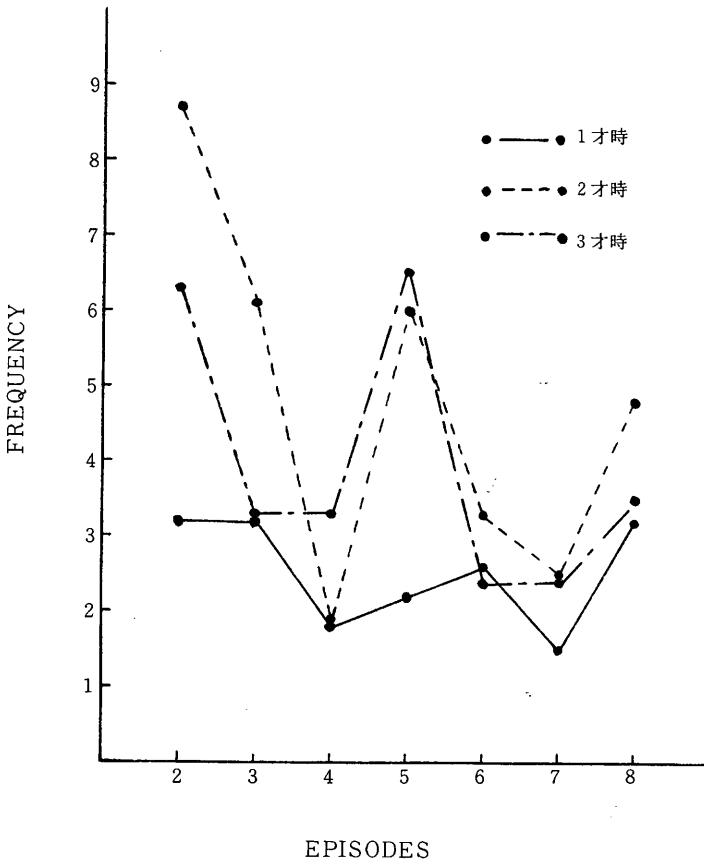


FIG. 4 Exploratory Locomotion

Ep. 4 と 5 について比較する。2, 3才時では Ep. 4 で有意な減少を示し ( $t=8.537, p<.005, t=3.364, p<.025$ ), Ep. 5 で顕著な増加を示す ( $t=2.509, p<.1, t=2.819, p<.05$ ) が, 1才時にはこのような差異は認められない。Ep. 5 と 6 では3才時に有意な減少が認められる ( $t=5.225, p<.005$ ) が, 1, 2才時には認められない。最も強いストレスを体験したあとに Stranger が入室したことの効果は, いずれの年齢においても認められない。Ep. 8 で母親が入室する効果は, 2才時に認められる ( $t=2.284, p<.1$ )。すなわち, 2才時では母親が同室することで, 子どもの探索行動が活発化するが, 1, 3才ではそのような差異は認められない。

II. 愛着行動

1. Crying

FIG. 5 は Crying についてみたものである。

Crying の中には本当の泣き, 泣きをとまなわぬ泣き顔だけのもの, さらに不快・不満を示す発声が含まれる。Ainsworth らは, Crying は子どものそばに母親を呼び寄せる手段として有効であることから, この行動も

愛着行動とみなしている。FIG. 5 に示されるように Crying のピークは Ep. 6 にあり, 探索行動のピークとは逆になっている。Stranger Situation では, Ep. 6 でストレスが最も強くなるように設定されており, その様を Crying は如実に示している。年間間 [ $F(2, 12)=11.073, p<.01$ ] および Ep. 間 [ $F(6, 12)=10.444, p<.001$ ] に有意差が認められる。1才時は2, 3才時に比較して Crying の頻度が非常に高い ( $t=3.328, p<.025, t=3.398, p<.025$ )。また2, 3才時では, 子どもが一人に残る Ep. 6 のあと, Stranger が入室して来る Ep. 7 で多少 Crying は減少する。しかし, 1才時にはそのような減少は認められない。このことは1才時の Ep. 6 での Crying は単に一人で室内に残される不安にのみ起因するのではなく, 母親から分離されることに対する不安を示しているものと考えられる。一方, 3才時においては, Stranger が入室する Ep. 7 でほとんど Crying は認められない。3才時の Ep. 6 における Crying は, 一人室内に残されたことに起因するものとも考えられる。しかし, Ep. 7 で被験児6名中3名のものが Stranger に対して“ママ”と母

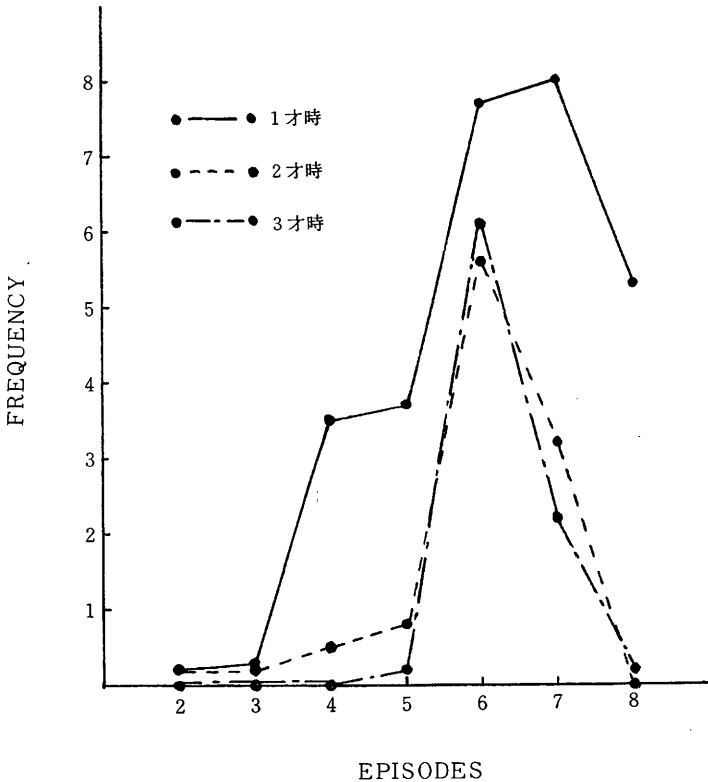


FIG. 5 Crying

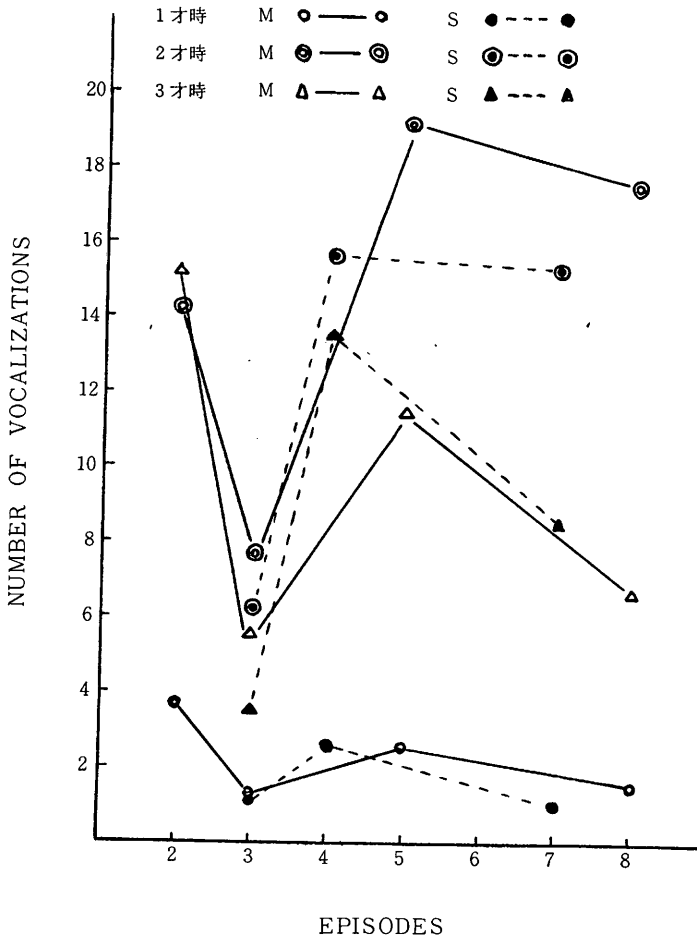


FIG. 6 Vocalization

親の所在を問い、“もうすぐ帰ってくるよ”との答を得て、安定した様子を示している。この事実は Stranger の存在そのものが対象児に安定感を与えているのではなく、むしろ母親が間違いなく帰ってくることを知った結果、安定を得たと解すべきであろう。このように考えると 1 才時との差異は言語能力の発達に起因する差異とみなすことが出来る。

## 2. Vocalization

FIG. 6 は母親および Stranger に向けてなされたポジティブな発声の絶対頻度についてみたものである。

母親に対してなされる Vocalization についてみると年令間に有意差が認められる〔 $F(2, 6) = 14.754, p < .01$ 〕が、Ep. 間には 5% 水準で有意差は認められない。1 才時は 2, 3 才時に比較して発声頻度が著しく少ない。こ

れは対象年令の言語発達の差異に基づくものと考えられる。

つぎに Stranger の入室による効果についてみると、2 才時では Ep. 3 と 5 の間に、3 才時では Ep. 2 と 3 の間に有意差が認められる ( $t = 5.052, p < .05, t = 3.276, p < .025$ )。すなわちいずれの年令でも母親と同室する Ep. の方に多くの Vocalization が認められる。1 才時にはこのような顕著な差異は認められない。これは、1 才時では Vocalization の頻度そのものが発達の少ないために、Stranger の存在が発に与える影響を不明確にしているものと考えられる。

つぎに Stranger になされる Vocalization についてみると、母親の場合と同様に年令間には有意差が認められる〔 $F(2, 4) = 10.364, p < .05$ 〕が、Ep. 間には有意差が



見いだされない。2, 3才時では Ep. 3 と 4 の間に有意差が認められ( $t=5.052, p<.005, t=3.263, p<.025$ ), Ep. 4 で Stranger への Vocalization は活発化する。このような変化は両 Ep. の Stranger の行動の差異に多分に原因するものと思われる。すなわち, Ep. 3 で入室した Stranger は, 最初は子どもとかかわりをもたないが, 後半から積極的にかかわりをもつように指示されている。そのため Ep. 4 では Stranger Fear が軽減し, その結果 Stranger への Vocalization が著しい増加を示しているものと思われる。

3. Visual Orientation

FIG. 7 は視覚的注意を母親および Stranger に向ける頻度についてみたものである。

Visual Orientation はこの行動の対象となる人との間に, ある距離が保たれている状況でなされる行動であり, 愛着行動としては消極的な行動である。母親については年令間および Ep. 間に有意差が見られない。しかし, Stranger に対しては Ep. 間に有意差が見られる [ $F(2,$

$4)=7.994, p<.05$ ]. 特に, 1, 3才時の Ep. 3 と 4 の間に急激な減少が認められる ( $t=2.584, p<.05, t=2.911, p<.05$ ). これは先に指摘したように, Stranger が子どもとかかわりをもつことにより, Ep. 4 では Stranger の新奇性が減少したことによるものと考えられる。

Ep. 3 で母親に向けられた注意の頻度と Stranger に向けられた注意の頻度についてみると, 2, 3才時では Stranger に Visual Orientation が向けられる頻度が高い ( $t=2.714, p<.05, t=2.484, p<.1$ ). また母子分離体験の影響についてみると, 1, 3才時で Ep. 2 と 8 の間に減少が認められ ( $t=6.635, p<.005, t=2.491, p<.1$ ), 母子分離を体験したあとの Ep. 8 で減少を示している。

4. Proximity and Contact Seeking Behavior

この行動の評定は, 母親および Stranger に近づこうとする行動の積極性と身体的接触を得ようとする行動の強さについて行なうものである。年令間および Ep.

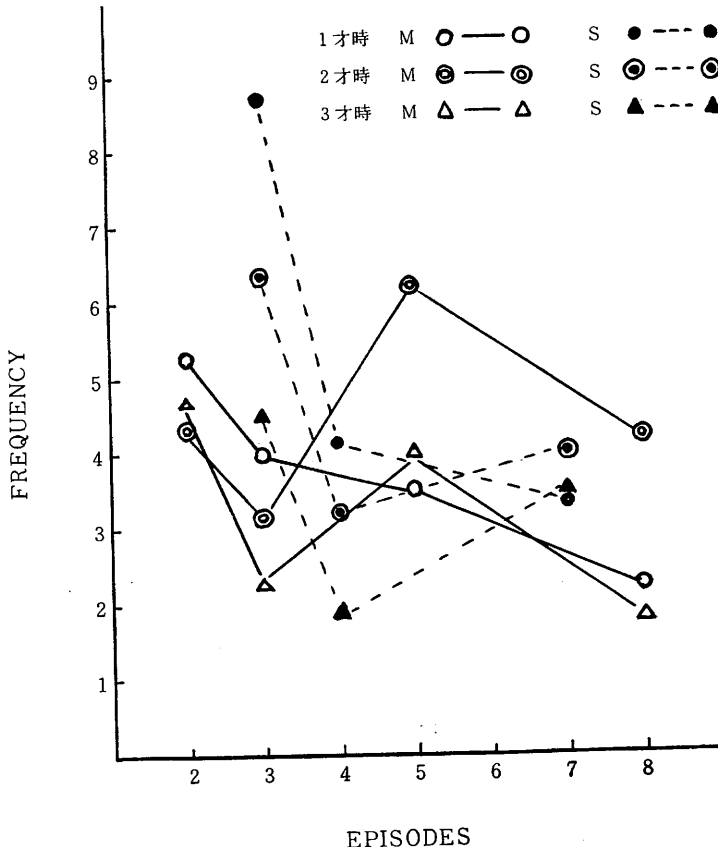


FIG. 7 Visual Orientation

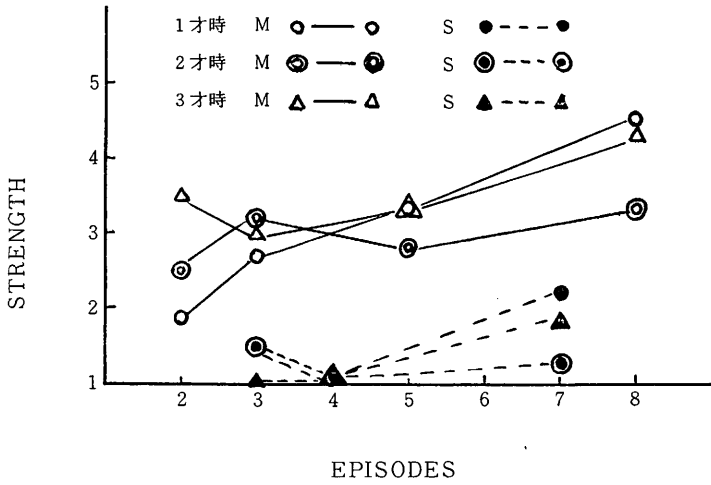


FIG. 8 Proximity and Contact Seeking Behavior

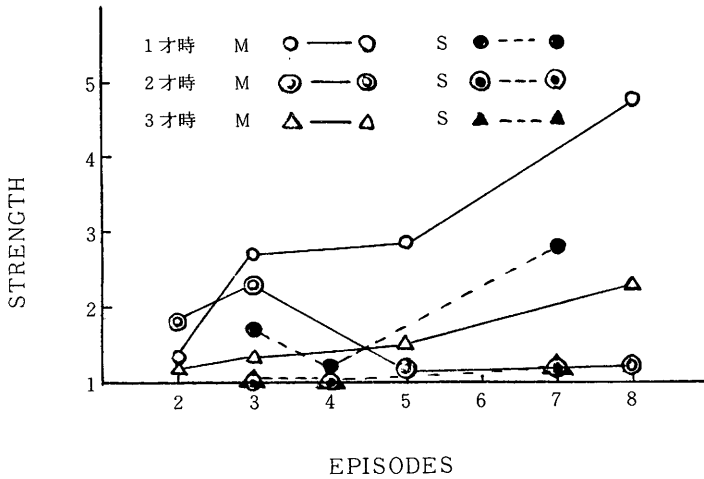


FIG. 9 Contact Maintaining Behavior

間に有意差は認められない。FIG. 8 に示されるように母親に接近・接触を求めようとする行動はEp.が進むにしたがってその強度を増す傾向がある。

母子分離がどのような影響を与えるかについてみるためにEp. 2 とEp. 8 を比較すると、1才時ではEp. 8で母親との接近、接触を求める行動が積極化する傾向がある ( $t=2.458, p<.1$ )。しかし、2, 3才時では明確な傾向は認められない。

### 5. Contact Maintaining Behavior

FIG. 9 は母親および Stranger と一度得た身体的接触をできるだけ続けようとして、子どもが払う努力の

程度についてみたものである。

年齢間およびEp. 間に有意差は認められない。母子分離がどのような影響を与えるかについてEp. 2 とEp. 8 を比較すると、1才時には明らかにEp. 8で積極的に身体的接触を継続しようとする ( $t=3.072, p<.05$ ) が、2, 3才時にはそのような差異は認められない。

母親と接近・接触を求める行動との関係についてみると、2つの行動の間に1才時には有意差は認められない。しかし、2, 3才時には接近・接触を求める行動の方が有意に強い ( $t=4.540, p<.01, t=2.149, p<.1$ )。また、両行動の関連をみると1才時には積極的に接近、接

触を求める子どもはその接触を保持しようとする傾向がある ( $r=.860, p<.05$ ).

また Ep. 7 で1才時は Stranger にかなり強い接触保持行動を示している。これは Ep. 6 で一人で在室する体験の結果、強いストレスを示す子どもの多くは Ep. 7 で Stranger にだっこされる。そしてある時間を経て後、だっこを中止しようとする時にこの接触保持行動を示す。これは1才時では Stranger と身体接触をもつことでストレスが軽減することがあることを示している。

6. Distance Interaction

FIG. 10 は母親および Stranger に対して子どもの方から主体的になされる言語的、非言語的相互作用の積極性についてみたものである。

母親については年令間 [ $F(2, 6)=7.460, p<.01$ ] および Ep. 間 [ $F(2, 6)=37.794, p<.001$ ] に有意差が認められる。Stranger に対しては有意差は認められない。FIG. 10 は先に Vocalization で認められた傾向とほぼ同様の傾向を示している。

Ep. 2 と 3 に有意差が認められる ( $t=6.109, p<.05$ ). すなわち、Stranger の入室により母親との相互作用は急速に減少を示す。また母子分離の影響は、1才時に顕著に認められる。Ep. 2 と 8 ( $t=2.540, p<.1$ ) および Ep. 5 と 8 ( $t=3.000, p<.05$ ) ではいずれも2度目の母

子分離を体験したあとの Ep. 8 で減少を示す。しかし、2, 3才時にはこのような著しい減少は認められない。

また1才時は2, 3才時に比較していずれの Ep. でも相互作用は余り活発でない。この要因としては Communication Skill の発達の問題も関係してはいるものと思われる。しかし、それ以上により積極的な愛着行動である Proximity and Contact Seeking Behavior や Contact Maintaining Behavior などがこの年令では安定を得るために、有効な行動であることによるものと思われる。一方、2, 3才時には愛着行動のレベルからみれば、より低い行動である Distance Interaction によって安定を得ているものと思われる。

Stranger との Distance Interaction が最も活発化するのは最初の母子分離が行われる Ep. 4 である。Ep. 3 に比較して Ep. 4 での増加が顕著に認められるのは3才時においてである ( $t=2.988, p<.05$ ). Ep. 4 で活発化した Distance Interaction は、Ep. 7 で再び減少を示す。特に1才時に有意な減少が認められる ( $t=2.795, p<.05$ ). Ep. 4 での活発化は、母親が在室する Ep. 3 で Stranger が子どもに積極的に働きかけることによって、子どもはその後が続く Ep. 4 で Stranger を不安対象としてではなく、遊び相手としてみなす結果、Distance Interaction に積極性をきたすものと考えられる。しかし

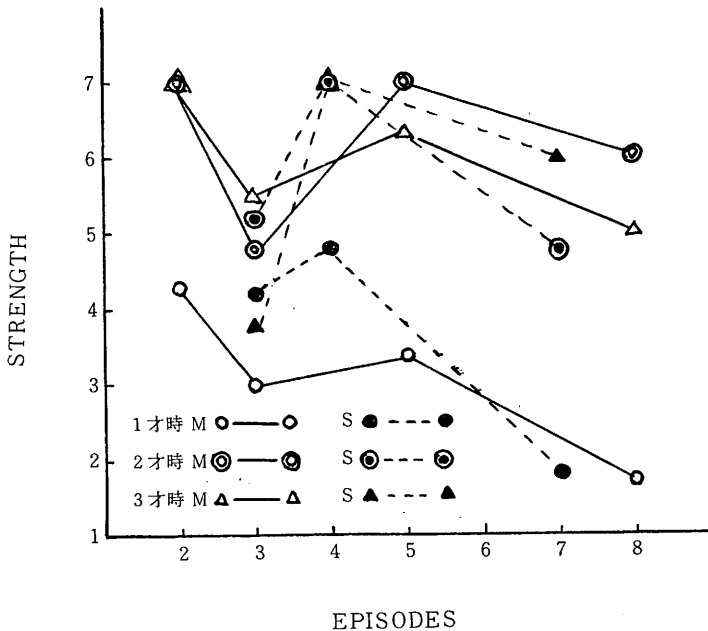


FIG. 10 Distance Interaction

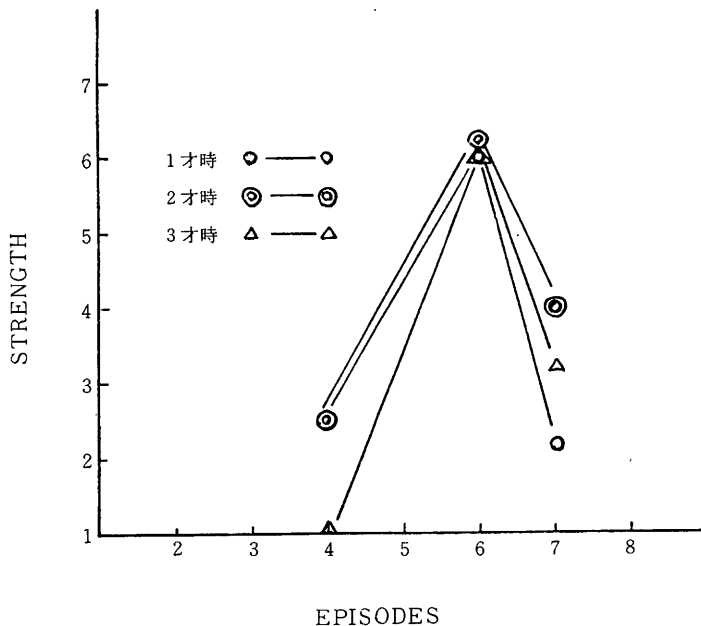


FIG. 11 Search Behavior

ながら、二度目の母子分離の経験は、1才時において最も強く影響を与え、Distance Interaction を急激に減少させる。一方、2、3才時においては、先に Vocalization の所でも指摘したように言語発達により状況理解が可能となり、Stranger との Distance Interaction にはほとんど影響を与えず、積極的な関係を保持している。

### 7. Search Behavior

FIG. 11 は母親が不在の Ep. において母親を捜し求める行動の強度についてみたものである。

年齢間には有意差は認められないが、Ep. 間には有意差が認められる [ $F(2, 4) = 15.421, p < .01$ ]. いずれの年齢においても Search Behavior は一人で在室する Ep. 6 でもっとも活発化し、Stranger が同室する Ep. 4 および 7 で減少する。このことは Stranger の存在がある程度、母子分離による不安を軽減させる効果のあることを示している。Ep. 4 と 7 の間には有意差は認められないが、両 Ep. における子どもの状態は非常に異なっている。Ep. 4 では、先に探索行動でみたようになりかなり積極的な探索行動を示す。また Distance Interaction も活発になされ、母子分離の影響は Stranger の存在によってかなり緩和されている。一方、Ep. 7 では Ep. 4 に比較して探索行動も Distance Interaction も減少を示しており、子どもは母子分離によってかなり強いストレスを受けて

おり、Stranger の存在だけでは安定を得られない状況をきたしている。特に、1才時では Stranger にだっこされているものが多く、だっこされているものは、思うような Search Behavior を表出できない状況におかれている。また、2、3才時は Stranger の“もう直ぐ帰って来るよ”との説明を得て、母親の入室を待てるなど、その場の状況がある程度理解される結果、Search Behavior が実際に子どもが母親を求める程には表出されないものと思われる。このような状況を考慮すれば、Ep. 7 における Search Behavior はもっと強くなるものと考えられる。このことは強いストレスを体験することが、子どもの側から母親に近づこうとする積極的な愛着行動を引きおこす要因であることを示している。

### 結 論

Strang Situation を用いて探索行動と愛着行動について縦断的に検討した結果、つぎのことが明らかとなる。

#### 1. 発達の変化について

1才時と2、3才時では Strange Situation に表出される探索行動に顕著な違いがある。すなわち、消極的な探索行動である Visual Exploration は1才に多く認められる。一方、大筋肉運動を伴う積極的な探索行動は2、3才時に多く認められる。このような年齢による探索行

動の差異の要因としては、運動能力の発達がかかわっているものと考えられる。愛着行動についても1才時と2、3才時に明確な差が認められる。愛着行動の表出は、子どもがおかれている状況をどのように理解しているかによって強く影響される。Strangerは玩具、身体的接触、言語的働きかけなどの手段によって子どものストレスを軽減すべき働きかけを行なう。子どもの言語理解能力がある程度進んでいるならば、これらの働きかけの中で状況理解に最も有効な手段となるのは言語である。それ故、愛着行動の表出の差異は、言語理解能力の発達の差異に基づくものと考えられる。すなわち、言語発達の未熟な1才時は、比較的理解能力の進んでいる2、3才時よりも強い愛着行動を示すのである。

## 2. 探索行動と愛着行動の関連について

まずStrangerの存在がどのような影響を与えるかについてみるために、母親が同室するEp.とStrangerが入室するEp.を比較する。探索行動は明らかにStrangerの入室によってその表出が抑制される。そして年齢によって抑制される探索行動のレベルが異なっている。また愛着行動についてみると、実験室が子どもにとって慣れていない場所であるために、Ep.2に母親とともにあっても愛着行動が認められる。しかし、比較的多く認められる行動はDistance・Interactionで比較的低いレベルのものである。Strangerが入室するとこの低いレベルの愛着行動は減少し、もっと高いレベルの愛着行動が上昇傾向を示す。この傾向はいずれの年齢においても認められる。

つぎに母子分離の影響についてみるために母親が同室するEp.とその前後のEp.を比較する。母子分離と母子再会の影響は探索行動ではExploratory Locomotionに如実にみることができる。すなわち、母親が同室するEp.ではいずれも上昇を示し、その他のEp.では下降を示す。そして上昇傾向はEp.が進むにしたがってその比率が減少し、全体としては下降傾向を示している。一方、愛着行動についてみるとProximity and Contact Seeking BehaviorにみられるようにEp.が進むにしたがって、その強度が増し、全体的には上昇傾向を示している。このような2つの行動は、先に仮定したように相対的な平衡関係にあることを示している。この関係もいずれの年齢においても共通に認められるものである。

以上のことから愛着の表出行動および探索行動のレベルは子どもの言語的、運動的発達との関連が強い。また

探索行動と愛着行動の2つの行動はいずれの年齢においても一貫した関連をもつものといえる。

## 今後の問題

今回は、探索行動と愛着行動について発達の検討したが、つぎの機会には愛着の安定および愛着の質的差異が発達にどのように影響を与えるものであるかについて検討する。

本研究は比較的長期に亘る研究であったため、同一人にStranger役を依頼することが出来なかった。実験を行なっている過程で、Strangerのかかわり方の巧知性が子どものストレスの軽減に大きくかかわりをもつことが感じられた。そこでこの違いが子どもの愛着行動および探索行動にどのような影響を与えるかについて検討する必要性を感じている。

## 謝 辞

2年余りに亘る研究に積極的にご参加下さいました母子の皆様、StrangerおよびVTR係を快く引き受けて下さいました東京家政大学児童学科3年生、4年生の多くの皆様そして資料のまとめのお手伝をして下さいました、卒業生の玉木直美さんに心から感謝を申し上げます。

## 文 献

- 1) A. L. Sroufe and E. Waters: Attachment as an Organizational Construct. *Child Development*, **48**, 1184 (1977).
- 2) B. Coates, E. P. Anderson, and W. W. Hartup: Interrelations in the Attachment Behavior of Human Infants. *Developmental Psychology*, **6**, 218 (1972 a).
- 3) B. Coates, E. P. Anderson, and W. W. Hartup: The Stability of Attachment Behaviors in the Human Infant. *Developmental Psychology*, **6**, 231 (1972 b).
- 4) E. Waters: The Reliability and Stability of Individual Difference in Infant-Mother Attachment. *Child Development*, **49**, 483 (1978).
- 5) E. Waters: The Stability of Individual Differences in Infant Attachment: Comments on the Thompson, Lamb, and Estes Contribution. *Child Development*, **54**, 516 (1983).

- 6) 繁多進, 新倉涼子, 桐島撰: 父母子関係に関する実験的研究<1>—発達の見地から—, 日本教育心理学会第25回総会発表論文集, 170 (1983).
- 7) J. Bowlby: *Attachment and Loss*, Vol. 1, *Attachment*, Basic Books, New York, 1969.
- 8) J. Rubenstein: Maternal Attentiveness and Subsequent Exploratory Behavior in the Infant. *Child Development*, 38, 1089 (1967).
- 9) M. D. S. Ainsworth: Attachment and Dependency: A Comparison. In J. L. Gewirtz (Ed.), *Attachment and Dependency*, V. H. Winston and Sons, Washington, D. C., 1972.
- 10) M. D. S. Ainsworth, and B. S. Witting: Attachment and Exploratory Behavior of One-year-olds in a Strange Situation. In B. M. Foss (Ed.), *Determinants of Infant Behavior*, IV, London, Methuen, 1969.
- 11) M. D. S. Ainsworth, S. M. Bell, and D. J. Stayton: Infant-Mother Attachment and Social Development: Socialization as a Product of Reciprocal Responsiveness to Signals. In M. P. M. Richards (Ed.), *The Integration of a Child into a Social World*, Cambridge University Press, London, 1974.
- 12) M. D. S. Ainsworth, M. C. Blehar, E. Waters, and S. Wall: *Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation*, Lawrence Erlbaum Assoc., Hillsdale, New Jersey, 1978.
- 13) M. Main: *Exploration, Play, and Cognitive Functioning as Related to Child-Mother Attachment*. Unpublished Doctoral Dissertation, Johns Hopkins University, 1973.
- 14) N. Bischof: A Systems Approach toward the Functional Connections of Attachment and fear. *Child Development*, 46, 801 (1975).
- 15) R. A. Thompson, M. E. Lamb, and D. Estes: Stability of Infant-Mother Attachment and Its Relationship to Changing Life Circumstances in an Unselected Middle-Class Sample. *Child Development*, 53, 144 (1982).
- 16) R. B. Cairns: The influence of Dependency Inhibition in the Effectiveness of Social Reinforcement. *Journal of Personality*, 29, 466 (1961).
- 17) R. B. Cairns: Attachment and Dependency: a Psychological and Social-Learning Synthesis. In J. L. Gewirtz (Ed.), *Attachment and Dependency*, V. H. Winston and Sons, Washington, D. C., 1972.
- 18) R. H. Walters and R. D. Parke: The Role of Distance Receptors in the Development of Social Responsiveness. In L. P. Lipsitt and C. C. Spiker (Eds.), *Advances in Child Development*, Vol. 2, Academic Press, New York, 1965.
- 19) R. R. Sears: Attachment, Dependency, and Frustration, In J. L. Gewirtz (Ed.), *Attachment and Dependency*, V. H. Winston and Sons, Washington, D. C., 1972.
- 20) S. Freud: Introductory Lectures on Psychoanalysis. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol. XVI, Hogarth Press, London, 1963.
- 21) T. G. R. Bower: *A Primer of Infant Development*, W. H. Freeman and Co., San Francisco, 1977.